

橋本竹下『竹下詩鈔』の序文、跋文について

鷹 橋 明 久

『竹下詩鈔』の作者、橋本竹下（一七九〇～一八六二）は江戸後期における尾道の豪商であり、漢文学者である。新修『尾道市史』六卷（青木茂編 尾道市役所 昭和五十二年）に、

橋本竹下、諱は徳聰、名は旋、字は元吉、通称吉兵衛といい後、莊右衛門と改む。竹下は其の号。三原川口家の生れ、橋本家を嗣ぐ。学を好み詩文を能くす。風流洒落君子の称あり。初め菅茶山に学び、後京都に出て、山陽に学ぶ。文久二（一八六二）年三月四日没す。慈観寺に葬る。七十三才。男徳光、令嗣子純（※）と共に「竹下詩鈔」を刊行す。宮原節庵其序文を作り、宇都宮竜山其跋文を作る。との記載がある。

※男徳光、令嗣子純とあるが、長男徳光（橋本清娛）、

令孫子純（橋本吉兵衛）の誤り。

このたびは、橋本竹下の人となり、及び彼の文学がどのようなものであったのかを探るため、『竹下詩鈔』に付された序文と跋文を掲載した。序文は菊池五山、梁川星巖、宮原節庵が、跋文は宇都宮竜山と頼支峯が執筆している。以下、順を追って【本文】と【現代語訳】を挙げていく。本文のテキストは奈良県立図書情報館本を用い、漢字はすべて新字体に改めて記載している。

◎菊池五山

【本文】

題竹下詩鈔首

中州擅詞名、二豪失菅頼。縦能有継者、將謂誠自鄣。

豈意出斯人。詩胆慙斗大。譬如姜伯約祈山重反旆。(以下略)

辛丑秋仲 五山 池桐孫

【現代語訳】

竹下詩鈔の首に題す^{はじめ}

日本で詞名をほしいままにした二人の豪傑、菅茶山・頼山陽を失った。たとえ、この二人を継ごうとする者があるうとも、誰も全く足下にも及ばなかった。しかし、まさかこんな人(橋本竹下)が出ようとは。詩を作ろうとする胆は斗升ほどであり、祈山で反旗を翻した姜維のそれにも匹敵するのではないだろうか。(以下略)

天保十二(一八四一)年

仲秋 五山 池桐孫(菊池五山の号)

※菊池五山 (二七七二―一八五五) 名は桐孫。通

称は左太夫。五山・娛庵・小釣雪と号した。讃岐(香

川県)の生まれ。京都で柴野林山について江戸で市

河寛斎の江湖詩社に入り、大窪詩仏・柏木如亭^{かしわぎじよてい}・

小島梅外とともに「四才子」と称せられた。その後、

おおむね江戸で活動して詩名を高め、晩年には高松

藩に仕えた。詩作に当たっては性靈派を尊んだ。『五

山堂詩話』『五山堂詩存』『清人詠物詩抄』『明人絶句』

などがある。(松浦友久編『漢詩の事典』一九九九年 大修館書店)

◎梁川星巖

【本文】

竹下詩藁序

詩者発乎性情、以主文者也。今之詩亦何異乎是。其異乎是也、則非詩也。三百篇既已經大聖人之刪定。刊為一經伝、之萬萬世而弗泯、天下誦而習之。蓋以其言出於自然、而不雜人偽。是以得失勸戒皆有以啓發人志、而其見効尤速非他教之所能及也。迨後世作者、不務思誠之功、遂以詩為誇才之具。

故其言不出於自然而不得不雜人偽。於是乎各舍本追末、以虛飾浮華相高而詩大變乎。至若今時、閩東盛以詠物爭功、閩西專以詠史鬪奇、則變之又極而其詠物竟不異乎泥塑之美人、剪綵之花枝、詠史猶夫画鬼雄鬼馬者。有何性情而存焉尚得謂之詩矣乎。雖然詠物詠史亦未可尽非之也。

若夫少陵氏之詠物、必以比興出之。枯枿病橘双燕百舌篇篇含蓄、其余不遑枚舉也。

玉溪生之詠史亦皆有所喻。茂陵為武宗發、隋師東為王庭湊作。蓋時事不可顯言、特以異代借影耳。凡唐

三百年間之詩類于此者殊不少、是則固諷人之遺意而亦無愧於其為詩矣。

吾友備後橋本元吉、以豪俊之資而写意於風雅、唐宋大家以至近世諸名人作、無不諷詠而溫繹。功力既至胸次豁然。及夫物触於外、情動於内則沛然發之於詩。袞袞乎、洋洋乎。罔知其所窮。

且其為辭、雄而弗犷、嚴而不刻、頗有忠厚惻怛之意。是則尤可敬矣。然其所為果能無愧於有唐諸賢乎、果能無愧於不雜人偽而垂教於後世者乎。余猶未之能知也。嗚乎是誠不易言也。余之嗜吟詠也不下於元吉。

三百篇已下、古今諸家之作亦多究心今已四十年矣。而未能庶幾乎此也則又当与元吉共勗之。元吉刻其詩、授余序、乃書以訂之。

天保歲在辛丑孟冬星巖真逸梁緯撰 於江戸玉池之枕
易行窩

【現代語訳】

竹下詩藁序

『詩經』国風の詩は心の趣きより発して、詩句に文あやを持たせたものである。今の詩も何らこれに変わりはなく、そのようにあるべきである。だから、これと異なるのは詩ではない。『詩經』の三百篇は大聖人孔子が編集したものである。『詩經』は聖

人孔子が述作し、解釈を加えたものであるから、永久に滅びることはなく、今でも天下の人々がこれを暗誦し、学んでいる。思うに、その詩語は心から自然に出たものであつて、私心や私情が加わったものではないので、そこに詠われた得失（成功と失敗）と勸戒（善を勧め悪を戒める）を知るだけで志を啓発し、その効果の現れるや、非常に速やかで（儒教以外の）他の教えの及ぶところではない。しかし、『詩經』より）後世の作者は、誠を思う心を忘れ、詩はただ詩才を誇るための道具となり果てている。

故にその言語は自然から出たものではなく、私心や私情が加わったものにならざるを得ず、輕薄で上辺ばかりのものになつてしまい、詩は大いに變質してしまつたのである。今事にあつては、關東は盛んに詠物詩で巧みさを競い、關西は専ら詠史詩で奇を闘わそうとしているのは、（詩の根本を）逸脱すること甚だしいのであり、詠物詩は泥人形の美人、造花の花枝を詠っているに異ならず、詠史詩は死んだ英雄、死んだ馬を詠っているのと同じなのである。どんな性情を持てば、これを詩と言うことができようか？しかし、そうはいうものの、詠物詩も詠史詩もすべてがダメというわけではない。

かの杜甫の詠物詩のごときは、必ず「比」と「興」(詩経の修辭法。「比」は比喩法、「興」は自然の事物を用いて人事を連想させる事柄を詠うこと)を用いて己の真情を詠いあげている。「枯^こ朽^く」「病^び橘^く」「双燕^{もず}」「百^も舌^ず」(すべて杜甫の詩篇の名)などの篇も含蓄があり、その他にも名作は枚挙にいとまがないほどである。

李商隱の詠史詩もみな喩えが用いられている。「茂陵」(漢の武帝の陵墓)は、唐の武宗皇帝のために詠ったものであり、「隋師東」(隋軍が東征する様子を詠っている)は、唐の王庭湊のために詠ったものである。思うに当時の世相について顕^{あき}らかに言うのははばかられたので、別の時代のモチーフを借りたのである。凡そ唐の三百年の詩でこれらの作品に類するような作品は少なからず存在する。これらは(人を諷めようとした)前人の遺意であり、(このような内容を含むものなら)詩として何ら愧^はずべきことはないものである。

私の友人、備後の橋本元吉は豪俊(非常にすぐれた才知)の素質で、思いを詩文に寄せ、唐宋の大家及び近世における諸々の名人の作に至るまで、すべてを暗誦し、すべてに習熟している。その効力はす

でに現れ、胸の中はからつと開けており、悟りの境地に近い状態にある。物事が心の表面に触れたり、感情が心の奥深くに動いたりすれば、縦^{ほしいまま}にこれを詩に詠むことができる。大きな河が充ち満ちて絶え間なく流れるように、その詩作は尽きることがない。さらに、その歌辞は、雄であつても粗ではなく、敵であつても酷ではない。情の厚さと悲しみの情にあふれている。これは最も尊敬すべきことである。しかし、その詩作は唐の諸賢に対して愧じることはないのか、果たして私心や私情を加えず、後世に教えを垂れるもの(『詩経』国風や唐代の杜甫の作品)に対して愧じることはないのか?私はこれに対する答えを持ち合わせていない。ああ、これは本当に言い難い。私の吟詠も元吉と同じ課題を抱えている。

『詩経』の三百篇をはじめ古今の諸家の作品について深く理解しようとして試みてすでに四十年。しかし未だにそれらの作品のレベルに近づくことができていない。元吉とともに切磋琢磨していきたい。元吉は自身の詩を刊行するにあたり、私に序文を依頼してきた。そこでここに私の思いを記したのである。

天保十二年(一八四一)初冬、星巖真逸梁緯(梁川星巖の名)、江戸玉池(神田のお玉が池)の枕易

行窩（星巖の住所）に撰す。

※梁川星巖（一七八九—一八五八）名は孟緯。字は公図または伯兔、無象。通称は新十郎。星巖、詩癖、三野逸民などと号した。美濃安八郡の生まれ。十二才の時父母を亡^{うしな}い、祖父の弟に養育された。十九才で江戸に出て古賀精里、山本北山に学び、ついで市河寛斎の江湖詩社に参加した。二十九才の時帰郷して、塾を開き、やがて再従妹^{またいとこ}の紅蘭と結婚。ともに西遊の旅に出る。足かけ五年の長旅の間に多くの詩を作り、詩人たちと交流、大いに名声を高めた。四十四才のとき、江戸の神田お玉池に居を定め、玉池吟社を開く。大沼枕山、森春濤はじめ明治詩壇をリードする人々が多く出た。そのころから星巖は世相の乱れに感じ、志士たちと交流して国事を論ずるようになる。五十七歳のとき、京都へ居を移し、尊皇攘夷の主張を持していよいよ政治的活動に傾斜、吉田松陰・釈月性・頼三樹三郎らと親交を結んだ。安政の大獄の直前、京都に流行していたコレラにかかって没したが、妻の紅蘭が逮捕されて、半年間投獄された。星巖は特に絶句・律詩にすぐれたと言われる。『漢詩の事典』

◎宮原節庵

【本文】

叙

竹下詩鈔者、我郷尾路橋本竹下翁所著也。翁之詩原于茶山山陽二先生、後自成一家。体兼今古、無所不能。而最善長篇。感慨激烈時、下雄健奇拔之語、諷諭勸戒時、又着婉曲含蓄之筆。其他有典雅壯者、有簡易澹泊者。各隨其題目体裁、無不變化自在。較之世々僅々能五七言絕句、沾沾自善者、詩格高下、筆力鈍敏、之相去奚啻天壤。翁詩之善如此則其名著遠迩、固無足恠者。

抑我尾路山陽道一馭、倚山面海、車馬之東西、商船之南北、無不日。而往還聚散、浪華以西一大港也。酒肉肆、舞妓樓、臨水連岸、到处無無糸竹醉影之声。旅人来遊則已消其客愁。況土人遊覽醺飲、或終至流連忘返鄉之旧族。

由之誤身者未必無之。而翁則不然。翁承累生豪富、謹厚修身、少好讀書、有才不驕、從鄉先生島居氏受學後、入茶山山陽二先生門。父行詩学益進。可以謂不虛三先生教導者矣。

今茲令嗣伯厚、令孫子純、相謀整理遺稿、遂得上梓。嗚呼伯厚、悲翁世間失明而又喜其以詩独樂、則

彫刻詩鈔必能慰翁之靈于地下。果然伯厚無復遺憾矣。既而囑序於余。余於翁實有師友義。距今六十余年前、余齡十六、妃來京師入山陽先生塾。時翁先來寓塾、矜余年少、循循教導。遂請託吾業于先生而去。

今於此詩鈔、雖無所請余、豈默無一言哉。書以伯厚子純云、癸未秋晚宮原竜撰並書。時年七十又九。

【現代語訳】

叙

『竹下詩鈔』は、我が郷里尾路の橋本竹下翁が著したものである。翁の詩の源は茶山、山陽の二先生にあり、その後自らの詩風を築きあげられた。詩のスタイルは今体（近体詩、律詩と絶句）も、古体（古詩）も、どちらもよくされたが、特に長篇が上手である。感慨激烈な時には雄健奇抜の語を使われ、諷諭勸戒の時には婉曲的で言外に含みがあるような筆を用いられた。その他、典雅壯麗なる詩があれば、簡易淡泊な詩もあり、それぞれ詩の題目や詩型に応じて変幻自在なものとなっている。これを世間のわずかに五言絶句や七言絶句ができるだけなのに喜んで偉そうにしている輩などと比べたら、詩格の高下、筆力の鈍敏ともに天と地ほどの開きがある。翁の詩はこのように素晴らしいもので、その詩名を近

くはもとより、遠くまで響かせることは決しておかしなことではない。

そもそも我が尾路は山陽道の一駅である。山に倚り、海に面し、日々、車馬も商船も東西南北から集まってくる。その往還聚散ぶりは、浪華以西の大港である。酒肉の肆や舞妓の楼が海を臨み、岸に連なり、管弦や酔狂の聲がしきるところはない（ほど賑やかだ）。旅人が尾路を訪れると、旅の愁いもすぐにどこかに消え去ってしまう。いわんや、その地に住んでいる人たちなどはぶつづけに道楽にふけて家に帰るのを忘れるほどである。したがって、身を誤った者たちは枚挙にいとまがないほどであるが、翁はそうはならなかった。翁は代々の豪富を継承されながらも、慎み深く身を修められ、年少の頃より読書を好み、才能が有りでも決して驕ることとはなかった。郷里の先生島居氏しますえから学問を授けられた後、茶山、山陽先生の門に入られた。その後、事業も、詩学もますます発展を遂げられたのは、三先生のご教導によるものであった。

今、ここに令嗣の伯厚氏、令孫の子純氏が（竹下翁の）ご遺稿を整理され、ここに詩集が出版されることになった。ああ伯厚氏（が仰るには）、父が失

明したのを悲しんだものの、詩が父の生きる支えになったことを私は喜んだ。詩鈔を出版すれば、必ずや、地下の父の靈魂を慰めることができるだろうし、伯厚（私）も思い残すことはない、と。そうして（詩鈔の）序文を私に託された。私にとって翁は、師と仰ぐ人であり、また友の關係でもある。今から六十年余り前、私は京都の山陽先生の塾に入塾した。その時、翁は塾に寓居しておられ、私が若輩者であるのを憐れみ、次々色んなことを教導して下さった。かくて、私の學業を（頼）先生に託して帰って行かれたのである。

今、この詩鈔を前にして、もし（伯厚氏、子純氏から）私に何の要請がなかったとしても、黙したまま一言も触れずにいられることなど出来よう筈がない。記して伯厚氏、子純氏に示して云う。癸未（明治十六年・一八八三年）宮原竜撰並びに書。時年七十九。

※宮原竜 名は土淵。はじめ謙蔵のち竜と改む。節庵はその号なり。尾道の名家渡橋貞兵衛の五男にして、祖先の姓宮原を継ぐ。山陽来尾の折よく渡橋に泊まり、節庵をその弟子とする。京都三本木の塾に至り薫育をうけ、山陽塾枢要の人物となる。山陽の

母に侍り、大和・伊勢に随行し大いに寵愛を受く。殊に書道に達し晩年の筆跡は山陽に優るとさえと伝えられる。京に歿す。（新修『尾道市史』第六卷）

◎宇都宮竜山

【本文】

跋

初余之来尾路、始見竹下翁、翁一見如故。不以余不肖使其長子伯厚及二弟從學焉。余因衣食於翁、且獲遍讀其藏書、余之於翁頗有恩義矣。翁好詩成癖。余亦同好、以故頗頗唱和、衿契相符日親。一日余賦詩呈翁曰、「匡學得依文不識、陳官何望魏無知」。翁亦有一律。其頸聯曰、「節近中秋君莫帰」。其上句余偶忘之矣。自後相稔無殆無曠日。余之往也、翁賦曰、「妻兒皆熟面、誰復修辺幅」。翁之来也、余亦賦曰、「礼薄而情厚、有如一家親情、好之密可以見焉」。翁夙好學、受道義於鄉先生島居実斎者。故學有根柢矣。至於詩則成於茶山山陽二先生之指授、尤長於歌行諸體。律絶窮其妙処、可謂造乎詩家之壺奥矣。世之目翁為詩人、亦有以也。

後患眼。謝事隱居養志於林泉与世乎相忘。客來則談、興到賦、或詠時事、或歌頌清世。其意皆出乎忠

厚惻怛。非通常詩人所能及。故特以詩概翁、非知翁者也。居數年余移住三原。三十年而還。還則翁之墓木已拱矣。

令孫子純、頭角嶄然、亦讀書于余塾。頃伯厚欲梓翁之詩。宮原士淵就遺稿、撰出三百篇、分為三卷題竹下詩鈔。子純拮据甚力。余亦旁助其校讐。每有語及余者、輒感念歎歎焉。

嗚乎、喪明猶著作不止。故篇什之富如此。若使翁終身有明、雄篇傑作其數倍蓰矣。惜夫、雖然桂林一枝、崑山片玉、人猶知其為珍矣。況既有三百之多。何必其余之求乎哉。若夫詩之工妙造詣、山陽先生及諸名家之批評備焉。故余不復嘖嘖也。

癸未冬日書于枇杷亭南窓下

八十一歲 竜山 宇都宮靖

【現代語訳】

跋

初めて私が尾路にきて、竹下翁にお会いした時、翁は私を一見するや旧知の仲のようであった。長子の伯厚、次男を従学させなかったのは私の不肖なるがゆえである。私は衣食を翁に頼り、そしてその蔵書の全てを読むことを許された。だから私は翁に大変な恩義を感じている。翁は詩を好むこと癖のよう

であり、私も同好の士だったので、度々唱和し、心の奥底を語り合いながら、日々親しくなっていた。ある日、私は詩を賦し、翁に差し出していった、「匡きやうの学び得たるは文不識に依り、陳の官は何ぞ魏無知を望まんや」と。翁にも律詩が一首あり、その頸聯に「節は中秋に近く、君帰ること莫なれ」とあった。その上の句は忘れてしまったが。その後、しばしば往来を重ねて充実した日々を送った。私が行くと、翁が詩を賦して言われるには、「妻児は皆みなな熟面す、誰か復た辺幅を修せん」と。翁が我が家に来られれば、私も詩を賦して言うに、「礼薄れはくくして情厚く、一家の親情の如き有り、之を好めば密みつに以て見る可べし」と。

翁は早くから学問を好まれ、世の道理を郷里の先生島居実齋しまいき じつさいより授けられた。故に学問に確りとした土台があり、詩に至っては茶山・山陽という二先生の教えに与り、歌行の諸体にとりわけ優れた力量を発揮された。律詩・絶句に至っては、その奥義を窮め、詩家としての核心にまでも至っておられると言える。世の人々が翁を詩人と見なすのも故あつてのことである。

その後、眼を患われた。様々な事業から手を引き、

隠居して林や泉にお気持ち移されるとともに、俗世間の事とは距離を置かれるようになった。客人が来れば語り合い、興がわけば詩を賦し、時には時事を詠じ、またある時には清世を謳歌された。それらの詩には厚い忠義の心と（世を）傷む心に溢れている。並の詩人が到達しえない所にまで達しておられる。よって、ただ翁の詩だけで翁を察しようとしても、翁を理解したことにはならない。数年間世話になった後、私は三原に移住した。三十年後、戻ってみれば、翁の墓地に生えた木はすでに両手で抱きかかえられるほどになっていた。令孫の子純は極めて優秀、私の塾で学業に励んだ。この頃、（翁の長男、子純の父）伯厚氏が翁の詩を出版しようとしていた。宮原士淵が遺稿から三百篇を選出し、三巻に分け、『竹下詩鈔』と題をつけた。（孫の）子純は懸命に作業を手伝い、私も仕事の合間に詩の校勘を手伝ったが、その際（翁の詩が）私に触れるのを見るたびに、心が高ぶり、目頭が熱くなるのであった。

ああ、（翁は）目が見えなくなられても、著作を続けられ、多くの詩を世に残された。もし、翁が亡くなるまで確りと目が見えていたならば、雄篇や傑作は今の数倍に達していたであろう。大変残念なこ

とである。しかし、桂の林の中にある一本の枝、崑崙山に産する玉のひとかけらですら、人は大変に貴重なものであることを知っている。況や（この詩集には）三百篇もの作品が収められているのである。どうしてそれ以上求める必要があるのか。ここに収められた詩が優れて学術的であるのは、山陽先生及び諸名家の批評が備わっているおかげでもある。故に私は多くを語ることはいらない。

癸未（明治十六年・一八八三年）冬日に

枇杷亭の南窓の下に書す

八十一歳 山 宇都宮靖

※宇都宮竜山 名は靖。字は好直、清記白茅と称し、龍山と号す。伊予新谷の藩士原東一郎の子にして尾道の旧家松田与南（松田卜隱家の継承者）の末弟にあたり、幼名を宗也という。幼くして帆足万里に学び、十六歳の頃藩の侍講となる。尚遊学の忘（※志の誤りか）去らず、万里の紹介により東都古賀洞庵に学ばんとするも許されず、即ち脱走して洞庵の門に入り、学成りて後尾道に帰る。広島の家老浅野忠敬に聘せられて、禄百石を食み三原藩の学政を司る。明治元年再び尾道に來り朝陽館を開き子弟を薫育す。竹雪山房詩鈔、興学通信、開港夜話問答、芳

山遊記等の遺書あり。後龍山文集の刊行あり、曾て明治維新前すでに大いに開港説を唱へ、忠敬に建議して松浜に築港と造らしむ。今の糸崎港これなり。明治一九（一八八六）年八月十一日八四にして没す。浄土寺に碑あり。糸崎にも松浜新港碑あり。墓は慈観寺。

◎頼 支峯

【本文】

跋

歐陽公嘗云、非詩之能窮人、殆窮者而後工也。其豈然哉。

余於尾路橋本竹下翁知之。翁承累世豪富為人謹慎、有醇行一徹。人皆屬望。夙就鄉先生島居氏、交學既長嗜詩。学茶山先生及吾先人、詩才秀發其詩兼諸体、最善長篇、有感慨激烈語、有雄豪奇拔語、至近体亦清廉冲澹、先生与先人嘆賞不已、常附評語奨励。

後造詣益深、鬱然自成一家。星巖梁翁亦許為関西一名家。嗚乎豪富如翁而有斯詩焉。謂窮者而後工哉。公有所為而言可知己。余觀世之詩家僅々能近体、少窺古風之域。儼然以大家自居。觀其詩乏溫柔敦厚之旨、問其人品則不聞有德望也。舍其詩則尋常人耳。

此豈可翁同日而語哉。

抑先人与翁交最熟於先人詩文集可見矣。向者令嗣伯厚、令孫清純、囑宮原土淵及予、校讐翁詩、以上梓。頃刻成因一二訂魯魚之誤、又附一語。養尾路叙旧誼而已。

明治甲申二月謹書于鳧水草堂

支峯 間人 頼 復

【現代語訳】

跋

宋の文人・歐陽修（唐宋八大家の一人）はかつて言った。「詩が詩人を窮（く）しめることができるわけではない、詩人が窮（く）しめば窮（く）しむほどその作る詩は巧妙なものになっているのだ」と。誠にごもつともなことである。

私は尾路における橋本竹下翁、彼を存じあげている。翁は先祖代々の豪富を継承してなお、お人柄はとても慎み深く、人情味あふれる方であった。人々はみな期待を寄せていた。幼年の頃より郷里の先生しますえ島居氏に師事し、学問が上達してくると詩を嗜むようになられ、茶山先生（菅茶山）と先人（支峯の父である頼山陽のこと）に学ばれた。詩の才能は大変にすぐれたものであり、諸体（漢詩の様々なスタイル

ル。古詩、絶句、律詩、樂府等）に通じておられたが、特に長篇を最も得意とされ、そこには感慨激烈の語、雄豪奇抜の語が見られる。近体詩（絶句・律詩・排律）も無欲清廉な内容のものであり、（菅茶山）先生と先人（頼山陽）も嘆賞してやまず、いつも評語をつけて奨励されていた。

後に詩の造詣は益々深まり、自ら一流派を構えられた。梁川星巖翁も関西の一名家としてお認めになられた。ああ、富豪でありながら、このような素晴らしい詩を詠われるとは。詩人が窮^くしめば窮^くしむほど、その作る詩は巧みになるというが、そういうことなのだろうか。

公（欧陽修）は「己を知るべし」と言っておられる。私が見るに、世の詩家は僅かに近体詩のみ詠うことができ、古体詩を詠うことは稀であるにもかかわらず、大家であるかのような顔をしている。彼らの詩を見れば、温厚さや人情味に乏しく、人としての品格について（人々に）尋ねてみても、人望が有ると聞いたことがない。彼らから詩を取り去つてしまえば、まさにただの人であるにすぎないのである。どうして（竹下）翁と同じ土俵で語ることができようか、いいやではしない。

そもそも先人（頼山陽）と（竹下）翁とのつきあいについては、先人（頼山陽）の詩文集に最も熟したものを見ることができる。以前、令息の伯厚氏と令孫の清純氏から、宮原士淵と私に翁の詩に校讐を施し、出版したいと依頼された。しばらくの間、一つか二つ「魯」を「魚」にするといった些細な誤りを訂正し、また、ちよつとした語句を付け加えたことなどにより完成した。尾路に養つた旧誼を叙したのみである。

明治十七年二月 謹んで鳧水（鴨川）草堂にて書す

支峯 閑人 頼復

※頼支峯（一八二三～一八八九）名は復、字は士剛。頼山陽の第二子。山陽が京都に移り住んだとき妻に迎えた梨影との間に生まれた子。山陽死亡の時は十才、その広島で事庵（山陽の長子）から教育を受けた。やがて江戸に遊学し門田朴齋、関藤藤陰らの庇護を受けつつ昌平黌に学んだ。嘉永六年（一八五三）より二年間越後水原の学問所に招かれた。帰洛後は父の後を継いで家塾を開いた。明治維新の際、車駕東幸にあたってこれに扈從、上京して大学二等教授に任ぜられ、明治二年（一八六九年）には大学少博

士、まもなく辞職して京都に帰り、悠々自適の老後を送り、明治二十二年に没した。

最後に、『竹下詩鈔』の篇目を挙げておく。

竹下詩鈔卷之上

自文政癸未至天保癸巳（1823～1833）

醉草歌

漫題

黃紬

待杏坪先生賞月于海竜寺

病中偶成

代内記悼

大雅道人画壁歌

放蛭

捕鼠行

山陽先生書来云移宅三樹坡為京師第一勝景地爾來詩酒拋事行

樂如意賦長句呈

中秋

山陽先生侍輿帰路留滯友人渡橋氏園賦呈

訪山陽先生于渡橋氏山園即事二首

同先生分詠三国人物

送先生抵神辺
廉塾分得韻齊

乙酉人日

舟中

路上

浪華舟遊即事

東大寺行遊南都有感而作

芳野

発芳野赴多武峯興上作（二首）

木兎川舟中

訪山陽先生賦呈

晚晴時余在山陽先生塾

端午

題高雲溟画

与猷似歌

詠史

画題

奴婢予作此篇以賦二子温恭

寄書梁伯兎於廉塾伯兎已赴讃岐書亦徒返帰杖聞言葦水留一封

欲寄伏書郵漂然桃梗蹤難定也趁風檣到讃州

即目

訪宥澄上人

讀宋史及寇準潭州役有感而作

宮原士淵遙示近作詠筆篇步韻却寄情見于詩

牡丹

画題二首

八幡太郎

広島帰路過松子山

食筭憶山陽先生及在京諸友

鸞女

讀紀曉嵐瀛奎律髓刊誤

晚酌招士淵不至

夏日偶作

囲碁

七月初三作進退韻

無題

宝鼎篇

班衣

梁星巖書至附以詠孤鴛近作

無題寄調後庭花

竹下詩鈔卷之中

自天保甲午到甲化甲辰 (1834 ~ 1844)

詠史七首

海月

竹田翁寓爽籟軒賦呈

春日鷹巢村訪麻生氏

爽籟軒偶成

六言二首

舟発

展山陽先生墓

但馬客中望北海作

天橋

文殊院

湯島客中二首

帰路

簡睡菴居士居士近寓東麓

獲施郭二氏画山水記喜

爽籟軒間吟

送春琴居士

臨別遇雨酒間賦似

竹田翁寓吉祥院賦呈

瘞紅碑

題群仙会飲図

画題

分題詠間雲

題竹田先生尾道遊覽志後

題画

聞兒虎說陰德太平記？

題茅花図

姜公

酬宮原士淵在江戸寄

赴広島途中作

病中偶成二首

友人宅觀明人米法画山水二首

睡菴居士海錯卷成賦謝

読黄載山日本刀歌作

悼竹田翁

題鳩杖

平相国

源廷尉

游声浦看松

秋夜憶宮原士淵土淵時在江戸

秋詞十題

或煮河豚招余余時読東坡集偶成

過孤松軒有懷故竹田翁翁曾寓此

平家蟹詞

間吟四首

楠公

舟達広島作

遊宮島

宇好直見訪 蘇東坡過過建昌李野夫公擇故居詩韻情見於詩

春琴居士嘗以施溥郭完画山水比之連壁（省略）（四首）

送阿部絹洲帰讃岐

呈兄君

題自画（五首）

春日訪宇好直

觀四十七士像

留侯

題桃菜図

宮原士淵将移住京都贖以一絶

紙鳶

喫蕎麦作

冬日同宇好直橋元路飲

舟達室津兒德温上陸別後舟中作

黄蘗山

宇治

展山陽先生墓

盆山

患眼

三叉

宇文直從倉敷歸訪余于爽籟軒坐間有盆山賦示

瓶梅

雪晴

人日

六言

賴山陽先生通議後

禽蟲詩詠晉人物

富士山

新秋間吟

爽籟軒樓後諸蟲競鳴中有一種聲類鈴鳴者莫能識其名十三夜對

月作此

曩從山陽先生訪茶山翁于廉塾距今二十年二先生已共就木余頭

亦白偶記一感

落齒歎

梁星巖書自江戸達。云明春移京。因憶故山陽先生代簡却寄

追憶竹田翁

竹下詩鈔卷之下

自弘化乙巳至安政己未（1845～1859）

題画

六言

月夜 十一頁

初夏偶成

画山水二首

美人讀書圖

諸葛瞻

明太祖

詠物五首

郭令公

孟德

隔廉梅同大内氏博作

病中謙和兄書至賦長句以呈

梅花水仙同餅二首

遊淨土寺遙望我爽籟軒紅梅作

夏日即事

和答禽言二首

中秋

寄題大山氏所藏木龍

籠鶯

看庭前草有感

啖西瓜

古松篇

漁父

題回憶故竹田翁

觀獵

聞秀策拳桔碁員喜作

碧蹄戰

与秀策

画題

一字至十字

曹操到劉備對酌圖

梁星巖客閑東幾二十年聞近帰住京師有此寄

佐嘉藩士千住君扈從君侯赴江戸途次

代一材官作

登千光寺

睡菴居士海錯圖鑑

爽籟軒

食山猪

花史

詠史十首

朱春水

江上驟雨

冬日間吟

病鷹

三原帰路輿上作

諸葛武侯像贊

浮積樓偶成

俠客

次韻横井生項王別虞姬作

玉浦竹枝

謝僧贈梅

会棋者

鰕

禽蟲絕句二十七首

野馬

送別秋水夫妻

有客問施溥郭完優劣者答以一絕

松鶴圖

病中偶成

訪富島氏隱居

源廷尉二首

寄今村綽夫

彭城士尚好食河豚魚賦示

夏日即事

同一友人散步東郊遂遊浄土寺

聽鶯

曉發海田駅

題浪華長橋図

蟾蜍石

聞英夷船至長崎港乞通互市作

水樓避暑

赴広島舟中

柳

看二子温恭囲碁作

妓王

題袈裟代夫死図

畜猫護書

無題

水魚

聞阿墨船來作

対潮樓席上次韓使韻

題画

聯句

送人遊芳野

無題

—たかはし・あきひさ 日本文学科准教授—